The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	Owen のメタファーとオクシモロン
Author(s)	大森, 文子
Citation	言語文化共同研究プロジェクト. 2019, 2018, p. 11-22
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/72809
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

Owen のメタファーとオクシモロン

大森文子

1. はじめに[1]

2018 年は第一次世界大戦（1914-1918）終結 100 周年にあたる。この節目を記念し、今年度の言語文化共同研究プロジェクトでは、第一次大戦の惨状、兵士の苦難を描いた詩人 Wilfred Owen（1893-1918）の詩を認知詩学の観点から分析する。

今回の共同研究プロジェクトで Owen の詩を取り上げようと考えたのには二つの契機がある。まず、第一次大戦 100 周年期間の半ばの 2016 年、言語文化レトリック研究会では「戦争詩人 Owen を読む」というセッションを企画し、Owen の命日の 11 月 4 日に渡辺秀樹教授、霜鳥慶邦准教授、大森文子の 3 名が研究発表を行い、その成果を言語文化共同研究プロジェクト 2016 報告書『交差するレトリック：精神と身体、メタファーと認知』に掲載した。歴史言語学者、文学者、認知言語学者がそれぞれの学術的立場、研究姿勢に基づいて分析する多角的共同研究に参加することができ、筆者は大きな刺激を受けた。そこで、大戦の休戦直前に西部戦線に散った Owen の没後 100 年でもある今年度、もう一度 Owen の詩に向き合いたいと考えた。

もう一つの契機は、2018 年度の本研究科大学院前期課程で開講された渡辺秀樹教授の授業「認知レトリック論研究」（金曜 2 時限目）を聴講する機会を得たことである。この授業で取り上げられた分析対象テクストの中に Owen の詩 “Anthem for Doomed Youth” および “Smile, Smile, Smile” があった。この 2 作品について、渡辺教授ならびに受講生諸氏との議論に参加することができ、研究意欲が大きくかき立てられた。“Anthem for Doomed Youth” は、戦場で無残に死ぬ若者たちへの賛歌である。授業当日は、時間の制約により、この詩についての筆者自身の考察を十分に口述することができなかったので、ここで少し述べておきたい。当該詩を以下に引用する。[2]

Anthem for Doomed Youth
What passing-bells for these who die as cattle?
Only the monstrous anger of the guns.
Only the stuttering rifles’ rapid rattle
Can patter out their hasty orisons.
No mockeries now for them; no prayers nor bells,
Nor any voice of mourning save the choirs, —
The shrill, demented choirs of wailing shells;
And bugles calling for them from sad shires.
What candles may be held to speed them all?
Not in the hands of boys, but in their eyes
Shall shine the holy glimmers of good-byes.
The pallor of girls’ brows shall be their pall;
Their flowers the tenderness of patient minds,
And each slow dusk a drawing-down of blinds.

兵士たちは、平時であれば、人生の最期を家族や親族、親しい人々に看取られ、手厚く弔われ、葬ってもらえたはずである。戦地へ送られたばかりに、彼らは砲弾の飛び交う過酷な環境で孤独に死を迎え、その亡骸は野ざらしとなる。人間としての尊厳を踏みにじられ、家畜のごとく死ぬ（“die as cattle”）ことを運命づけられた（“doomed”）若者たちに対し、この詩では Owen の慈愛に満ちたまなざしが注がれる。その慈愛は、この作品全体にちりばめられたメタファーに表れている。銃の炸裂音（“the monstrous anger of the guns”）を弔いの鐘（“passing-bells”）に結びつけ、ライフルの発射音（“stuttering rifles’ rapid rattle”）を祈りの声（“orisons”）に、砲弾が飛ぶ甲高い音（“wailing shells”）やラッパの音（“bugles”）を弔いの声（“voice of mourning”） に、少年たちの目

[1] 本研究は以下の科学研究費補助金の助成を受けている：基盤研究 C「英詩メタファーの認知詩学」（研究代表者：大森文子）、基盤研究 C「英詩メタファーの構造と歴史」（研究代表者：渡辺秀樹）。
[2] 本稿における Wilfred Owen の作品の引用はすべて、Lewis ed.（1963）に依る。

にきらめく別れの涙（“the holy glimmers of good-byes”）を蝋燭（“candles”）に、少女たちの蒼白の額（“the pallor of girls’ brows”）を棺衣（“pall”）に、耐える心の優しさ（“the tenderness of patient minds”）を献花（“Their flowers”）に、日毎のゆっくりと訪れる夕闇（“each slow dusk”）を引き下ろすブラインド（“drawing-down of blinds”）に結びつけるメタファー写像により、命を奪われ野ざらしとなった兵士の頭上にとこしえに日が昇り、沈むのみという無情な＜戦場＞という現実世界に重なるように、＜葬礼＞の概念領域が浮かび上がる。その概念領域には、弔いの鐘が鳴り、祈りの声や聖歌隊の合唱が響き、蝋燭がともり、棺衣がかけられ、花が捧げられた手厚い葬儀の場があり、死者の魂を祭る部屋では遺された人々が毎夕ブラインドを引き下ろす。これは、現実には存在しない幻の空間であるが、この作品世界の中に確かに現出した、死者への敬虔な祈りの空間である。

Owen のメタファーが生み出した、死者の魂の平安を祈る幻の空間は、兵士たちを惨殺する戦場という現実の空間と完全に矛盾するオクシモロン的関係にあるとも言える。オクシモロンとは、反義関係にある、矛盾する一対の語が並置された比喩を指す（*OED* “oxymoron” n.1.参照）。[3] この詩の前半に描かれた、「怒りに満ちた銃の物凄い発射音」（“the monstrous anger of the guns”）と「弔いの鐘」（“passing bells”）の組み合わせ、「ライフルのダダダダとどもる高速の発射音」（“the stuttering rifles’ rapid rattle”）と「祈り」（“orison”）の組み合わせ、「砲弾が飛ぶ甲高い音」（“wailing shells”）と「聖歌隊」（“choirs”）の組み合わせは、意味的に矛盾している。詩の最終行で並置された、死屍累々たる野辺に訪れる「毎日のゆっくりとした夕暮れ」（“each slow dusk”）と、死者の魂を祭る部屋での毎日の「ブラインドを引き下ろす動作」（“a drawing-down of blinds”）も、遺された人々の真心をこめた祭礼の有無という点で矛盾関係にある。このような、現実には存在しえない、あるいは現実と矛盾する空間を創り出すのがメタファーやオクシモロンといったレトリックの働きである。これらのレトリックを駆使した表現には、看取りも弔いもない、孤独な兵士たちの現実を言葉の力で覆し、何の救いもない彼らを自らの詩で何としてでも賛美しようとする Owen の深い愛情、兵士たちの禍々しい運命に対する深い悲しみと怒りが感じられる。

本研究では、Owen の詩のもつレトリックの力に光を当てたい。彼が 1916 年に著した “Storm” を分析の対象とし、この詩に出現した諸概念を扱った Owen の別作品も参照しながら、この詩の意味の構造、およびそこに作用しているメタファーやオクシモロンの働きについて考察する。

2. Wilfred Owen の詩 “Storm” とその解釈

本節では、“Storm” のメタファー分析に先立ち、まずこの作品を鑑賞し、その意味の解釈を試みる。以下に、“Storm” のテクスト本文と、筆者による翻訳案を記す。

Storm

His face was charged with beauty as a cloud
With glimmering lightning. When it shadowed me
I shook, and was uneasy as a tree
That draws the brilliant danger, tremulous, bowed.

So must I tempt that face to loose its lightning.
Great gods, whose beauty is death, will laugh above,
Who made his beauty lovelier than love.
I shall be bright with their unearthly brightening.

And happier were it if my sap consume;
Glorious will shine the opening of my heart;
The land shall freshen that was under gloom;
What matter if all men cry aloud and start,
And women hide their faces in their shawl,
At those hilarious thunders of my fall?

[3] *OED* では “oxymoron” *n*.1. は “*Rhetoric*. A figure of speech in which a pair of opposed or markedly contradictory terms are placed in conjunction for emphasis.” と定義されている。

（試訳）

嵐

彼の顔は美しさを帯びていた　まるで
稲妻を帯びてかすかに輝く雲のように。それが私に影を落とし
私は震え　不安になった　まるで
輝かしい危険を引き寄せ　おののき　うなだれる木のように。

だから私は導体となり　その顔に帯びた稲妻を放電させてあげねばなるまい。
偉大なる神々にとって美は死なのだ　だから神々は天上で笑い給うだろう
彼の美しさを愛よりも愛らしいものにされたのだから。
神々のこの世のものとも思えぬ光輝で私も輝くことだろう。

そして　さらに幸せだろう　私の樹液が尽きるならば。
私の割けた心材は神々しく輝くことだろう。
薄暗闇に覆われた大地は爽やかによみがえるだろう。
私の倒壊の陽気な大雷鳴で
男たちが皆大声で叫び驚き
女たちが顔を肩掛けに隠したとしても　それが何だというのだ。

この詩の第 1 連では、語り手自身と彼という 2 人の人物が登場する。語り手は彼の顔を雲に喩え、そこに美しさ（“beauty”）を認識しているが、それはかすかに輝く（“glimmering”）稲妻を帯びたような美しさである。1 行目に示された “charged” という語は帯電を表す語で、“charged with beauty” は顔の美しさを帯電した雷雲の輝きと捉える見方が反映されている。

さらに、語り手は自分自身を一本の木に喩える。樹木は、雷雨の際にはその背の高さゆえに、雷を引き寄せる（“draws”）危険性を伴う。嵐の気配に幹や枝を震わせ、うなだれる木のように語り手は不安感に苛まれるが、その不安感を語り手自身は必ずしもネガティブなものと見なしてはいない。「輝かしい危険」（“brilliant danger”）という表現は、語り手が直面している、死をもたらす危険性を、きらめく美しさをもつ素晴らしいものとして捉えていることを表している。

その特異なオクシモロン的認識は、第 2 連における、「偉大なる神々にとって美は死なのだ」（“Great gods, whose beauty is death,”）（6 行目）という表現にも反映されている。さらに、5 行目の “So must I tempt that face to loose its lightning.” という表現も示唆的である。木が導体となり、雷雲の放電を誘導するように、彼の顔から「死の放電」を誘導することが自分にとって必然であることが、助動詞 “must” により示されている。放電されれば、すなわち稲妻が自分に落ちれば、命を奪われるわけであるが、語り手は、その自分自身の死の瞬間を、8 行目で「神々のこの世のものとも思えぬ光輝で私も輝くことだろう」（“I shall be bright with their unearthly brightening.”）と、神々しい美しさをもつものとして捉えている。

さらに第 3 連では、語り手は自分の死の直後の様子を想起している。第 1 連からの＜木＞のメタファーが継続され、9 行目で自分の出血（あるいは体内の血流の停止）を「樹液が尽きる」（“my sap consume”）こととして表現している。10 行目の “my heart” という語は、語り手の心臓を指す語であるが、＜木＞のメタファーの観点から見ると、「心材」（heartwood）、すなわち樹幹の中心部の褐色になった部分を指すと解釈できる。*OED* を参照すると、“heart” *n*. 15 は “= HEARTWOOD *n*. 2. Also: the heartwood of (a specified tree).” と定義され、“heartwood” *n*. 2 は “The dense, inner part of the wood of a tree trunk, yielding the hardest timber, often darker in colour and more resistant to decay than the surrounding wood due to higher gum or resin content; also called *duramen*. Contrasted with *sapwood*.” と定義されている。sapwood とは、樹皮の下で heartwood を囲む辺材、すなわち樹液に富む白色の材部を指す語である。詩の 9-10 行目における、“sap” が尽き、“heart” に穴が開くという記述は、辺材と心材の両方、すなわち木の幹全体が壊滅的損傷を受けるということを意味していることがわかる。この 2 つの比喩により、血液が出尽くし、心臓に穴が開くという自らの身体の壊滅的損傷を表現しているのであるが、この事態を詩人は「さらに幸せな」（“happier”）こととして捉え、「神々しく光り輝く」（“glorious”）と描写している。

そして、雷雲が垂れこめたために薄暗闇（“gloom”）に包まれていた大地が、嵐に見舞われることで爽やかによみがえる（“freshen”）だろうと述べている。このように、自身の死の瞬間に加え、死後についても、語り手は一貫して肯定的に予測している。12-14 行目では、「私」という木が雷に打たれて倒れるその大音響で、男たちが大声で叫び驚き（“cry aloud and start”）、女たちが顔を肩掛けに隠して（“hide their faces in their shawl”）嘆く様子が描かれるが、それも大きな問題ではない（“What matter … ?”）と軽視し、むしろ、落雷による木の倒壊の大音響を「陽気な」（“hilarious”）音として、これも楽しく好ましいものと認識している。

この詩のタイトルに用いられている “storm” という語には、「（豪雨や雷などを伴う）嵐」という気象用語としての意味に加え、「雨あられと降る弾丸」という比喩的意味、また軍事用語としての「強襲」という意味もある（*OED* “storm” *n*. 1.a., 2, 5 参照）。この詩では、嵐という気象現象を比喩として用いることにより、語り手が属する部隊への激しい攻撃を描写し、その中で雷に打たれ倒れる樹木という比喩により、攻撃で命を落とす自分自身を想像しているのである（“storm” という語の意味の重層性については渡辺秀樹教授より示唆を受けた）。

3. “Storm” における「私」と「彼」の関係とメタファー

本詩の第 1 連、第 2 連に示された、雷雲に喩えられる彼と、木に喩えられる語り手自身は、上記のように、両者ともに美しいものとして描かれているが、この「彼」という人物は何者か。彼と語り手とはどういう関係にあるのか。

この二人の関係については、この詩では明記されておらず、彼が語り手にとって戦友なのか、敵兵なのかはわからない。この詩から読み取れるのは、雷雲の放電が樹木に死をもたらすように、彼が自分自身に死をもたらす存在であることと、同時に彼が命を失った、あるいは語り手の目の前で今にも命を失おうとしていることである。彼の生命の喪失は、6-7 行目の “Great gods, whose beauty is death, will laugh above, / Who made his beauty lovelier than love.” という表現に表されている。この詩行が述べているのは、神々が「愛よりも愛らしい美」を彼に与えたこと（“made” という動詞が過去形になっていることは注目に値する）、そして神々にとっての美とは死だということである。そこから推論できるのは、神々が彼に死を与えたことである。厳密に言えば、彼の喩えとなっている雷雲は電荷を帯びている状態であり、まだ放電はしていない。生命体が感電死するのは電流が通過することによるということを考慮すると、描写の瞬間に彼が死んでいるのかどうかはわからない。しかし神々が彼という雲に電荷を帯びさせた時点で、切迫した死が運命づけられていることは確かである。この詩で、彼その人を指す “he” という語が用いられておらず、1 行目に “his face”、および 5 行目に “that face” というように、彼の顔を指す語だけが用いられていることから、語り手は彼の顔のみに注目しているように思われる。語り手は彼の顔を認識できるくらいの至近距離に位置していて、その顔には死相が現れているのを見て取っているのであろう。そして、その死相を、語り手は「美しいもの」（“beauty”）と捉え、輝く雷雲に喩えているのである。おそらく、語り手が誘発する（“tempt”）ことで彼という雷雲から放電がなされる（つまり電荷が雲を通過し離れる）ことにより、彼の死が完了する。そして、その放電を浴びた時点で、木に喩えられた語り手の身体は、木が大地と接触しているがゆえに、速やかに通電し、ただちに命を奪われることになる。両者の死の連鎖を二人の人間関係に照らして考えると、彼が語り手とともに戦っている戦友であるとしたら、彼が死ぬことによりただちに語り手にとっての戦力が削がれ、自分の命が危険にさらされ、死が目前に迫るということが考えられる。彼が語り手の敵兵であるとしたら、至近距離で遭遇し、相撃ち（あるいは刺し違えかもしれない）を余儀なくされ、ともに死ぬことを運命づけられた間柄なのかもしれない。

しかし作者 Owen にとって、この二人が味方どうしなのか敵どうしなのかは、おそらく大きな問題ではない。参考のために Owen が著した “Strange Meeting” と題された詩に目を移すと、この詩の語り手は死者たちがうめき声を挙げる地獄に降り、そこで一人の男に出会う。「見知らぬ友よ」（“Strange friend,”（l.14））と語りかける語り手に対し、その男は、自分の人生や、戦いの意味について語り、「友よ、僕は君が殺した敵だよ。この暗闇でも君のことがわかったよ。だって昨日君が僕を突き刺して殺したとき、今と同じように顔をしかめたからね。」（“I am the enemy you killed, my friend. / I knew you in this dark: for so you frowned/ Yesterday through me as you jabbed and killed.”（ll. 40-42））と自分の正体を明かし、「さあ、ともに眠ろう」（“Let us sleep now….”（l. 44））と地

獄で仲良く眠りにつく。この描写からは、兵士にとって敵兵は勝つか負けるか、生きるか死ぬかの運命を分ける相手ではなく、ともに死を運命づけられた友（“friend”）、同じ境遇の仲間であるという Owen の認識が見て取れる。“Storm” の詩においても、「彼」と「私」が敵か味方かは大きな問題ではないがゆえに、その立場を明示しなかったのであろう。むしろ、立場がどうあれ、両者ともに死を運命づけられていることこそが重要であり、それを Owen は描写したかったのではないかと思われる。

この詩人の意図は、「彼」と「私」を描写するメタファーの概念領域の選択のしかたに表れている。「私」の喩えとして用いられている＜木＞のメタファーは、Owen の “Spring Offensive” と題する詩にも見える。この詩では、出撃の合図を立ったまま静かに待つ兵士たちが木に喩えられ、「彼らは微動だにしない木のように息をしている」（“They breathe like trees unstirred.”（l. 18））と描写されている。この直後に出撃を命ずる短い言葉が発せられ、彼らは一斉に突撃し、戦死していく。＜木＞は、足や翼をもつ動物と異なり、地面に根を張り動けない存在であり、自由に行動することも運命を選択することも許されず運命に受け身になるだけの兵士の身の上を象徴的に表現している。[4] 同様に、「彼」の喩えとして用いられている＜雲＞も、神々の力により稲妻を仕込まれて帯電し、放電させられ、嵐が終われば消えるしかない運命にあり、大きな力に動かされて戦闘に身を投じ、はかなく消える兵士の運命を表すメタファーとして機能している。＜雲＞と＜木＞は、空と地上という対照的な場所に位置し、稲妻を放電する側と感電する側という非対称的な関係にあるように一見思われるが、神々という存在の前では、等しく電荷を帯びさせられ、命を奪われるに過ぎず、はかない命であるという点ではまったく同じである。彼と語り手の死の連鎖は、＜雲＞と＜木＞における帯電と放電の連鎖という観点から描写されている。

この詩における＜雲＞のメタファーおよび＜木＞のメタファーの写像は以下のように図示することができる。

雲	→	彼
雲が稲妻を帯びる（帯電する）	→	彼の肉体が死の必然を帯びる
稲妻を帯びた雲の美しさ	→	死に瀕した彼の顔の美しさ
雲が電荷を放出する（放電する）	→	人の命を奪う
雷雲が電荷を失い、消える	→	彼が死ぬ

【図１】＜雲＞の観点から＜彼＞を理解するメタファー

木	→	私
樹液	→	血液
心材	→	心臓
木が風に震える	→	私が不安に震える
木が雷に打たれる（電荷が通過する）	→	私が死ぬ
被雷した木の輝き	→	死の瞬間の私の美しさ
木が倒れる	→	私が倒れる
樹液が尽きる	→	血液が尽きる
心材が割ける	→	心臓に穴が開く

【図２】＜木＞の観点から＜私＞（語り手）を理解するメタファー

[4] ＜木＞という概念の「運命を受容する」という特性は、アメリカの作家 Willa Cather（1876-1947）の小説 *O Pioneers!* の中の言葉 “I like trees because they seem more resigned to the way they have to live than other things do.” にも反映されている。岩田（1970）はこの言葉を「私は木が好きだ。ほかのものよりも、木は自分の生きねばならない道にあきらめているように見えるから。」と訳し、「むやみに自分を壊そう、別の道を歩いてやろうとしないで、自分に与えられた道を受け容れ、それを生きようとするのも、一つの考え方ではある。ここに開拓者らしい、じっと耐え忍ぶ心が感じられる。」と述べている。Cather の引用句および岩田の考察については、渡辺秀樹教授より教示を受けた。さらに、渡辺教授から貸与を受けた Arthur (2014) *The Faces of World War I* という写真集には、第一次世界大戦の戦場の夥しい数の写真が年ごとに整理され掲載されているが、焼け野原となり樹木の見えない殺風景な戦地の写真が多い中で、特に印象に残ったのが、塹壕より上に頭を出すと狙撃されるため、樹皮のみを残して幹の中身が空洞となった一本の木の中に身を隠して、相対する両軍の間の中間地帯（no-man’s-land）を偵察する兵士を写した写真である（p. 206）。幹がくり抜かれ、木としての生命を失った後もなお、兵士を隠すカムフラージュとして機能する樹木の姿が痛々しい。

4. 美のオクシモロンと神々の笑い

上述のように、この詩では、神々にとって美しさとは死の中にある、死こそが美しいもの、という考え方が記されている。＜美＞と＜死＞という概念を結びつける着想は、同時代のアメリカの詩人 Wallace Stevens が著した “Sunday Morning” という作品中の “Death is the mother of beauty”（l. 63, l. 88）という表現にも見られる。[5] この表現は、＜死＞が＜美＞を生み出す存在だとする思考を表したものであり、“Sunday Morning” では「他ならぬ死があればこそ、われわれの夢や欲望の充足が得られる」（“hence from her, / Alone, shall come fulfilment to our dreams / And our desires.”（ll. 63-65））と、死があるからこそ生きることの喜びがあると説く。一方、Owen の “Storm” が描く神々の認識は、“Sunday Morning” の詩想とは異なる。“Death is the mother of beauty” とは、死を前提とするからこそ限りある生に美しさを感じることができるということであるが、Owen の言う “beauty is death” とは、生の中に美を見出すという感覚ではなく、死の中にこそ美があるという意識を表すものである。

生きている人間の通常の認知とは異なる、この特異でオクシモロン的な認識のしかたは、過酷で壮絶な兵役を経験した Owen ならではのものである。彼の “Apologia Pro Poemate Meo” と題する作品には「死は不条理なものとなり、生はさらに不条理なものとなる」（death becomes absurd and life absurder,（l. 6））と述べる詩行がある。生と死を比較すると、死の方が不条理の程度が低いとする認識が表れている。そこには、通常の価値観の反転がある。この価値観の反転は、オクシモロンと特徴づけられるような表現を生む。

I have perceived much beauty
In the hoarse oaths that kept our courage straight;
Heard music in the silentness of duty;
Found peace where shell-storms spouted reddest spate.
(“Apologia Pro Poemate Meo,” ll. 25-28)

（試訳）
私は大いなる美を見てきた
我らの勇気をまっすぐに持続させるあのしわがれ声の罵りの中に。
兵役の沈黙の中に音楽を聞き
砲弾の嵐が真紅の洪水をほとばしらせる場所で平和を見つけた。

上記の詩行にはオクシモロンが重なり合っている。「しわがれ声の罵り」（“the hoarse oaths”）は通常は耳に障る醜い音声と認識されるはずであるが、語り手はそこに「美」（“beauty”）を見出す。黙々と遂行される兵役（“the silentness of duty”）は、心を楽しませる音は何もないはずであるが、語り手はそこに「音楽」（“music”）を聴く。そして「砲弾の嵐が流す真赤な血の洪水」が溢れる戦場（“where shell-storms spouted reddest spate”）は平和とはかけ離れたものであるが、語り手はそこに「平和」（“peace”）を見る（第 2 節で “storm” の詩タイトルの意味の重層性に言及したが、“storm” が描く嵐は、まさにこの “Apologia Pro Poemate Meo” にある「砲弾の嵐」（“shell-storms”）である）。戦場で目にし、耳にする悲惨な状況の中に、通常は認識しえないはずの価値を見出し、肯定的に捉えるという、平時に生きる者には想像し難い詩人の特異な認知様式が表れている。

Owen の＜美＞という概念の特異な捉え方が表れている詩としてもう一つ注目しておきたいのは “Beauty” と題する未完の詩である。この詩の草稿には、以下のような詩行が見られる。

A shrapnel ball
Just where the wet skin glistened when he swam.
Like a full-opened sea-anemone.
We both said ‘What a beauty! What a beauty, lad!’
I knew that in that flower he saw a hope
Of living on, and seeing again the roses of his home.
Beauty is that which pleases and delights,

[5] この作品は 1915 年に *Poetry* 誌に掲載され、Stevens の声価を確立した（亀井・川本編 1993 参照）。

Not bringing personal advantage—Kant.
But later on I heard
A canker worked into that crimson flower
And that he sank with it
And laid it with the anemones off Dover.
(“Beauty,” ll. 15-26)

（試訳）
榴散弾が一発
ちょうど彼が泳いでいたその時に　濡れた肌が輝いたその場所に。
まるで満開の海のアネモネ（＝イソギンチャク）のように。
僕たちは二人とも言った「なんて美しいんだ！なんて美しいんだ、おい！」
僕にはわかった　あの花の中に彼が希望を見つけたことを
生き続ける希望　再び故郷の薔薇を見る希望を。
美とは人を楽しませ　喜ばせるもの
ただし個人の利益をもたらしてくれるものではない　とカントは言う。
しかし後に僕は聞いた
毛虫が一匹その真紅の花に入り込んで悪さをし
彼は花とともに沈み
その花をドーヴァー沖のアネモネに並べて横たえたことを。

上記の引用には、榴散弾の破裂によって水面に上がった飛沫をイソギンチャクに見立てる見方が反映されている。イソギンチャクは、日本語の漢字表記は「磯巾着」であり、口をひもでくくる袋に喩えた名がつけられているが、英語では “sea anemone”（海のアネモネ）と呼ばれ、花に喩えられている。このアネモネの花のような水しぶきは、泳いでいた兵士の血に染まって真紅（“crimson”）である。[6] それを見ていた語り手は興奮して仲間とともに「なんて美しいんだ！なんて美しいんだ、おい！」と口にする。一見残酷な表現のように見受けられる。平和な日常を生きる私たち読者にとっては、泳ぐ兵士に榴散弾が当たり血の色の水しぶきが上がるというのは目を背けたくなるような情景である。しかし、このような凄惨な情景を「美しい」と捉えるオクシモロン的認識は、戦闘に身を置く兵士たちにとっては何の矛盾もない。Lewis（1963）は「Owen はこの詩のクライマックスを、軽傷ではあるが本国への強制送還に値する深刻さの傷を負うことの美しさに置こうとした」[7] と述べている。兵士は、被弾し、負傷し、本国へ送還されれば、残酷な戦闘から離れることができる。19-20 行目の詩行（“he saw a hope / Of living on, and seeing again the roses of his home”）が述べるように、強制送還に値する負傷は、死を免れ、生きて再び故郷の薔薇を見ることができるという希望に直結している。戦友が負傷により生きる希望をもつことができたことを祝福しようとする気持ちが “What a beauty!” という叫びには表れている。21-22 行目に示されているように、美という概念を、たとえ「個人の利益をもたらしてくれるものではない」（“Not bringing personal advantage”）としても「人を楽しませ、喜ばせるもの」（“Beauty is that which pleases and delights”）だと捉える語り手にとって、戦友が負傷という損害を被ったとしても、それによって彼が生きる希望をもてたという事態は楽しく、喜びに満ちたものであり、それゆえに語

[6] “anemone” の花言葉は、野生は「病気」、栽培用は「遺棄」であり（『ジーニアス英和大辞典』（2001-2016）参照）、この詩における兵士の負傷あるいは死を示唆する血の色の水しぶきを描写する喩えに相応しい不健康でネガティブな意味をもつ。また、*OED* の “anemone” n. 1.a. の 1873 年の用例には、真紅のアネモネをアドニス（女神アフロディテに愛され、アフロディテの恋人アレースに殺される美少年）の血から生まれたとするギリシャ神話由来の記述が見られる（1873 J. A. SYMONDS *Stud. Greek Poets* xii. 403 Scarlet and white anemones are there, some born of Adonis' blood, and some of Aphrodite's tears.）。*Encyclopædia Britannica* のオンライン版の “anemone” の項目にも “According to a Greek myth, as Adonis died, red anemones (A. coronaria) sprang up from his blood. In remembrance of this, red anemones are often known as Adonis flowers.” という記述がある（https://www.britannica.com/plant/anemone）。このギリシャ神話の逸話からも、赤いアネモネが「血」や「死」と強く結びつくことがわかる。なお、“anemone” の花言葉および *OED* の用例の存在については、渡辺秀樹教授より教示を受けた。

[7] “Owen intended the culmination of the poem to be the beauty of getting a flesh wound serious enough to send one back to ‘Blighty’.” (Lewis ed. 1963:140)

り手は、真紅に染まった水しぶきを美しいと感じたのである。[8]

結局は、「生きて故郷の薔薇を見る」という希望もむなしく、25-26 行目に記されているように、戦友はこの榴散弾の被弾により、海底に沈んで命を落とす（“he sank with it / And laid it with the anemones off Dover”）。薔薇とアネモネという 2 種の花の比喩が対比的に描かれていることが興味深い。薔薇は故郷へ帰るという希望を象徴するメトニミーである（rose には England を指すメトニミーとしての意味もある（*OED* “rose” *n*. 6.b.参照））。アネモネは血の色の水しぶきの喩えとなるメタファーであり、血の色の水しぶきは死を表すメトニミーである。希望の薔薇が消え、死のアネモネとともに戦友は沈むのである。このような皮肉な結末にもかかわらず、“What a beauty!” という発言は、生きたいという、人間として当然の希望を共有する兵士によるということには変わりはない。この表現は一見矛盾をはらんだオクシモロンに見えても、整合性が取れている。一方、話を元に戻すが、“Storm” の詩に描かれた、“beauty is death” という神々の認識は、美という価値基準を生には認めず、死のみに見出すという点で、言わば究極のオクシモロンである。

死を美しいものと見なす神々の思考様式は、6 行目に示された「天上で笑い給うだろう」（“will laugh above”）という神々の行動についての詩人の予測とも緊密に結びついている。この「笑う」という描写は、Owen の “The Last Laugh” と題された詩を想起させる。この詩では、戦場で被弾して死にゆく兵士たちの頭上を飛び交う爆撃の轟音が、“chirp,” “chuckle,” “guffaw,” “titter,” “hoot,” “hiss” といった多様な笑い声を表す laugh の類語を用いた比喩を重ねることで描写されている。[9] 渡辺（2017）はこの詩を詳細に分析し、“He laughs loudest who laughs last”（最後に笑う者が一番大声で笑う）という諺に言及しながら、「タイトル “The Last Laugh” は戦場で死が様々な笑い声で砲撃し銃撃し、兵士を殺していく、そして『最後の笑い』を死が高らかに笑う戦場、『死の勝利』という意味だ」と論じている（p. 15）。この砲撃の高笑いに通じる非情さが、“Storm” の詩の神々の歓喜の高笑いにはある。生きたいという希望は叶えられず、確実に死ぬことが定められた兵士から見ると、人間の運命を決定づけ、高笑いする神々の差配は人間の思考の次元とかけ離れた非情なものであることが、“beauty is death” というオクシモロンに表現されている。さらに、8 行目で自分の死の瞬間の姿を「この世のものとも思えぬ光輝」と捉え（“I shall be bright with their unearthly brightening”）、10 行目で心臓に開いた穴を神の栄光に光り輝くものと捉え（“Glorious will shine the opening of my heart”）、14 行目で自分が倒れるときの雷鳴を「陽気な」音として捉える（“hilarious thunders of my fall”）、というオクシモロン的描写の連続も、過酷な戦地に身を置き、生きることを願い死を忌み嫌うという通常の人間の感覚を保つことが許されず、人間を思うがままに死に至らしめる神々の差配に従順に屈服したがゆえに獲得した、極限状態の価値転換、自らの死を肯定的に捉える認識の表れと考えられる。瀬戸（1997）はオクシモロンについての論考の中で、「オクシモロンとして対義語が融合するには、対義語が活性化し、意味エネルギーの急激な高まりが生じなければならない。この意味エネルギーがある臨界点を突破したとき、真の意味的融合が生じる。」（p. 61）と述べている。Owen のオクシモロンは、彼が身を置いた戦場という極限状況の中で、生と死の意味エネルギーが臨界点を超えたことにより生み出されたとも言えよう。

5. 嵐のあと：人間社会との乖離

“Storm” の詩の第 3 連、12-14 行目では、木に喩えられた語り手自身が倒れた後のことが描かれている。木が倒壊し、その際の大雷鳴に男たちが驚愕して叫び、女たちが顔を肩掛けに隠すという比喩的描写は、語り手にゆかりのある人々、おそらくは故郷に残した人々が語り手の戦死の報に接して驚き、悲嘆に暮れる様子を想像したものと考えられる。ここで注目に値するのは、人々

---

[8] 中元（2009:156）はこの詩について「軍隊用語としての beauty は本国へ送還される程度の負傷を指す。」と述べている。筆者は第一次世界大戦時の兵士たちの間で用いられていた “beauty”という語の用法については、何点かの辞典を調査したが、裏付けをとることができなかった。しかし、Berrey and Van den Bark (1953) *The American Thesaurus of Slang* には、“beauty” がボクシングの用語として hard blow の意味で用いられるとの記述があり（p. 664）、人間の身体への強烈な攻撃という文脈でこの語が用いられる場合があるという事実は興味深い。

[9] “The Last Laugh” では機関銃や大砲など様々な武器が登場するが、その中には上述の “Beauty” の詩で描かれた榴散弾もある。雲のごとく空に現れた榴散弾がゆったりとした身振りで「バーカ！」と言い、散弾の破片がくすくす笑う様が描かれている（“And the lofty Shrapnel-cloud / Leisurely gestured, —Fool! / And the falling splinters tittered. ”（ll.8-10））。標的を逃さず確実に殺傷する榴散弾の残忍さが象徴的に描写されている。

の驚愕と嘆きを「それが何だというのだ」（“What matter …?”）と冷めた目で見る捉え方である。

ここで参考にしたいのは、Owen の “S. I. W.” と題する詩に描写された兵士を取り巻く社会の人々の認識である。“S. I. W.” では、過酷な戦場で身体も精神も蝕まれた挙句、自死を遂げる Tim という兵士が描かれている。Tim の出征時に、周りの人々は「お前はいかなる時もドイツ兵どもに勇者の顔を見せつけてやるのだろう」と励まし（“He’d always show the Hun a brave man’s face;” (l.2)）、父親は「生きて恥をさらすくらいなら死になさい、お前の出征を見送るのを誇りに思うよ、そうとも、嬉しいよ」と声をかけ（“Father would sooner him dead than in disgrace,— / Was proud to see him going, aye, and glad.” (ll.3-4)）、妹たちは「女の私たちも、撃って、弾を込めて、苦しめてやれればいいのに」と言い（“Sisters would wish girls too could shoot, charge, curse …” (l.7)）、弟たちは「兄貴の好きな煙草を送るよ」と言って彼を送り出す（“Brothers—would send his favourite cigarette.” (l.8)）。これらの発言からは、故郷の人々が、身内の出征を誇らしく嬉しいことと捉え、イギリス兵はいかなる時も、死をも恐れず勇猛果敢で、煙草を楽しむゆとりもあり、容易に敵を打ち負かすという幻想を抱いていることがうかがえる。現実の戦場の悲惨さとはかけ離れた彼らの幻想に、Tim は苦しめられ、追い詰められることになる（この詩における兵士の苦悩の描写の認知詩学に基づく分析は大森（2017）を参照されたい）。

故郷の人々の無邪気な誤解は、“Smile, Smile, Smile” と題する詩にも示されている。この詩で Owen は、兵士たちの微笑みを 3 度に分けて描く。新聞に掲載された政治家の威勢の良い、無神経な発言を戦地の兵士たちが読み、戦地の悲惨な現状を無視したその内容に皮肉な微笑を浮かべるが、戦場カメラマンの撮影に対しては、満面の笑みを浮かべる。その写真を新聞で見る故郷の人々は「ほら、微笑んでるよ！兵隊さんたち、今は幸せなんだね、かわいそうに」（“How they smile! They’re happy now, poor things.” (l. 26)）と実感をこめて言うが、兵士たちを幸せだと独り合点する故郷の人々の認識は大きな勘違いである（この詩の兵士たちの微笑みの 3 度の描写についての詳細な分析は渡辺（2017）を参照されたい）。

また、“Dulce et Decorum Est” と題する詩も注目に値する。この詩の前半では、疲労困憊し、足取り重く行軍する兵士たちがガス爆弾の攻撃を受ける。兵士たちの一人である語り手は無我夢中でガスマスクを装着し、辛くも難を逃れるが、マスクの装着が間に合わなかった仲間が一人、爆弾の犠牲となる。詩の後半では、犠牲となり荷馬車に積まれたその仲間の無残な姿を詳細に描写し、語り手は友に向かって、その無残な姿をともに見てくれたなら、と呼びかける。「そうすれば友よ、君はそんなにも熱い心で言えなくなる、向う見ずの栄誉を求めて熱狂する子供らに、『祖国のために死するは甘美にして名誉なり』という、あのおなじみの虚言など」と（“My friend, you would not tell with such high zest / To children ardent for some desperate glory, / The old Lie: *Dulce et decorum est / Pro patria mori*.” (ll. 25-28)）。[10] この友への呼びかけからは、祖国のために死ぬことを “Dulce et decorum” と美化するホラティウスの言葉が、Owen の祖国イギリスにおいて戦意高揚のために使われ、歳若い子供たちを鼓舞していたこと、その祖国での教育の有様を、戦地の苛烈な状況を知る Owen は「嘘を教えている」（“tell … the old Lie”）と批判的に見ていたことが伺える。

これらの詩から見えてくるのは、戦争の実態を経験している兵士たちと、戦地の現実を知らない銃後の人々の意識の乖離についての Owen の嘆きである。“Storm” の詩に話を戻そう。この詩の男たちや女たちの驚愕と悲嘆を冷ややかに見る語り手の「それが何だというのだ」（“What matter …?”）という言葉は、この詩人の嘆きを背景にしたものではないかと考えられる。男たちが大声で叫び（“cry aloud”）、驚く（“start”）としても、戦場の残酷さをどこまで理解しているというのか。女たちが肩掛けに顔を隠す（“hide their faces in their shawl”）としても、無残な死に瀕した兵士の苦しみをどれだけわかった上でのことなのか。彼らの振る舞いは、語り手にとって意味の希薄な、無価値なものに過ぎないのである。また、「顔を隠す」という行動は、哀悼の意を表す動作であるが、見方を変えれば、戦場の現実から目を背け、戦死した兵士の苦難の実態を知らないこととして済ますという意識の表れと解釈することも可能である（渡辺秀樹教授の示唆による）。[11] 戦

---

[10] ここでの「友よ」（“My friend,”）は “Strange meeting” における「友よ」の呼びかけ（第 3 節参照）とは異なり、皮肉な響きが感じられる（『ランダムハウス英和大辞典』“friend” *n*.7 では呼びかけの皮肉用法への言及がある。）

[11] 女たちが顔を隠すという動作の記述は、『詩篇』13 篇冒頭の「主よ、いつまでなのですか。とこしえにわたしをお忘れになるのですか。いつまで、み顔をわたしに隠されるのですか。」（“How long wilt thou forget me, O Lord? for ever? how long wilt thou hide thy face from me?” (Psalm 13.1)）を連想させる。

死者を悼むといっても所詮は他人事、無邪気で呑気な勘違いに基づいた悲嘆に過ぎないのではないか。「それが何だというのだ」という言葉は、彼の死が故郷の人々にとって、落雷に「ああ、びっくりした」と言っている程度の軽いものに過ぎないことを示しているとも言える。

"What matter …?" という表現に見て取れる詩人の銃後の人々への失望は、"Storm" の詩で男たちと女たちを、字義通り人間として描写し、一方で語り手自身には＜木＞、もう一人の兵士である「彼」には＜雲＞というメタファーを適用するという描写のしかたにも表れている。語り手と彼という二人の兵士を＜人間＞という概念ではなく、自然界に属する別の概念領域に当てはめて理解するというメタファー思考を用いることにより、＜人間＞のカテゴリーに属する銃後の人々と別扱いの捉え方をしているのではないだろうか。このメタファーは、裏を返せば＜人間＞一般に対する Owen の失望の表現でもある。

銃後の人間社会との乖離の意識によってOwenが生み出した兵士のメタファーを考察する際に、参考にしたいのは、"I saw his Round Mouth's Crimson" と題する断片詩である。この詩については、佐藤（1993）の日本語訳及び解説が示唆に富む。詩の引用の後に佐藤訳を付記する。

I saw his round mouth's crimson deepen as it fell,
Like a Sun, in his last deep hour;
Watched the magnificent recession of farewell,
Clouding, half gleam, half glower,
And a last splendour burn the heavens of his cheek.
And in his eyes
The cold stars lighting, very old and bleak,
In different skies.
("I saw his Round Mouth's Crimson")

（佐藤芳子訳）
私は　彼のまるく開いた口の真紅の血の色が　血が流れ落ちるにつれて
日没時の太陽のように　次第に暗赤色へと深まっていくのを　見た。
彼の顔に　この世との別れの命の太陽が　雄大に沈んでいくのを　じっと見つめていたが、
それは　次第に雲間に隠れ、半ば輝き 半ばしかめ面をしながら　沈んでいき、
最後の命の輝きが 彼の両頬の天に　一瞬に燃えた。
やがて　彼の両の目に
冷たい星々が、太古からの荒涼とした光を放って輝いたけれど、
それはこの世とはまた別の空だ。

佐藤はこの詩について、「この詩はきわめて完成度の高いもので、断片とはいえないほどである。訳者には、この詩は、キーツのオード、'To Autumn'（「秋に寄せる」）を連想させずにはおかない。一瞬の輝きを天に残して雄大に消えてゆく太陽の命の輝きは、キーツにあっては、秋という美しくもはかない季節の輝きと重ねられて、鮮やかな映像を読み手に残し、オウエンのこの詩では、死にゆく兵士の頬に浮かぶ生色の最後の輝きにたとえられて、落日の太陽は本来は凝視するにたえない兵士の死を読み手に直視させる。」（佐藤 1993:116）と解説している。佐藤が述べるように、死にゆく兵士の無残で忌まわしいはずの姿が、この詩では壮麗な美しさをもつものとして描かれている。兵士の頬には「天」（"heavens"）が広がり、そこに丸く開いた兵士の口の血の色が「沈む直前の太陽」（"a Sun, in his last deep hour"）のように深まっていく。死に瀕した兵士の顔に残された最後の生気が、"magnificent"（3 行目）や "splendour"（5 行目）といった語により、荘厳な光輝として描写され、その生気が失われていく様子が、空に「雲がかかる」（"clouding"）（4 行目）という比喩により描かれる。そして、命を失った兵士の虚ろな目の色が、現世とは次元の異なる空に輝く太古の星の冷たい光（"The cold stars lighting, very old and bleak, / In different skies"）（7-8 行目）に喩えられる。この詩では一貫して、＜天象＞の概念領域がメタファーの根源領域となり、そこに属する広大な空、落日の輝き、雲、星の光という概念が、死に瀕し、刻々と生気を失っていく兵士の顔の変化を理解するための要素として用いられている。

これらの概念の使用が、英詩の伝統において広く見られる＜一生は一日である＞（A LIFETIME IS

A DAY）（Lakoff and Turner 1989:6）や＜命は炎である＞（LIFE IS A FLAME）（Lakoff and Turner 1989:31）という概念メタファーに深い関わりをもつことは言うまでもないが、それに加えてここで注目したいのは、＜天象＞という概念領域の選択、荘厳で美しい日没および夜空の描写が、兵士に対する語り手の畏敬の念に裏打ちされているということである。これは、キリスト教文化圏における重要な文化モデルである、＜徳＞を＜光＞として理解し、＜徳の高い者＞を＜天に属する存在＞として理解するメタファー（VIRTURE IS LIGHT, THE VIRTUOUS IS A CELESTIAL ENTITY）（大森 2007；大森 2011；Omori 2015 参照）に基づく認識である。[12] 死にゆく兵士の顔に天空を、落陽の荘厳な光を、そして星の光を見るメタファーは、兵士を徳の高い存在として崇敬する気持ちの表れと見なすことができる。

同様のことが "Storm" の詩にも言える。"Storm" の語り手は、「彼の顔」を稲妻を帯びて美しく輝く雲に喩え、その美しさを神々のなせる業と捉えている。＜天象＞という概念領域に属する光り輝く雷雲という媒体の選択は、彼を高徳の存在と見なす認識のしかたを背景としている。語り手自身については地上の存在物である木に喩えているが、この木も、雷に打たれることにより、地上のものではない（"unearthly"）（8 行目）光輝を帯びる、つまり天に属する存在に準ずるものとなることを語り手は夢想している。第 1 節で取り上げた "Anthem for Doomed Youth" では、「家畜のごとく」死に、その亡骸が野ざらしとなる兵士たちに対して＜葬礼＞の概念領域を提示し、幻の空間で手厚く弔うことで、彼らの人間としての尊厳を取り戻そうとする詩人の愛情が感じられた。"I saw his Round Mouth's Crimson" や "Storm" におけるメタファーでは、さらに高次の＜天象＞の概念領域を提示することで、死にゆく兵士に人間を上回る価値を認め、表現しようとしているのである。こういった描写のしかたは、大声で驚愕する男たちや、肩掛けに顔を隠す女たちに対する字義的な描写と著しい対照をなしている。語り手にとって、銃後の社会に生きる彼らは、あくまで地上に生きる人間であり、＜天象＞に属する概念に喩えられるような徳の高さなど持ち合わせない卑俗な存在である。戦地の実態をおそらくまったく理解していないであろう銃後の社会の人々と、戦地に身を置き神の意のままに自らの命を犠牲にする自分たちとの意識の乖離を、卑俗な＜地上の人間＞と徳の高い＜天象＞という二つの概念領域の心理的距離の観点から語り手は理解し、表現しているのだと考えられる。

6. おわりに

以上、Owen の "Storm" の詩を、同様に第一次大戦の惨状を描いた Owen のいくつかの作品とともに観察し、この詩に表れたメタファーやオクシモロンといったレトリックの働きを分析した。＜雲＞と＜木＞のメタファーが、語り手を含む二人の兵士の関係性を効果的に表していること、雲と木に稲妻を帯びさせ、その死を美しいと高笑いする神々の認識のオクシモロンから推察される戦地の極限状況における価値転換、そして死を運命づけられた二人の兵士を表すメタファーに＜天象＞の概念領域が用いられていること、そのメタファーを適用させるか否かという描き方の違いが、戦地の兵士と銃後の人々との意識の乖離を示していることを考察した。"Anthem for Doomed Youth" では、若者たちをとりまく過酷な現実とは相容れない幻の空間をメタファーあるいはオクシモロンによって生み出し、家畜のような扱いを受ける兵士たちをレトリックの力により人間として復権させようとする Owen の試みを見て取ることができた。"Storm" のレトリックはさらに、命を奪われる兵士を天に属する高徳の存在に昇華させ、不条理な運命を強いられた兵士の命の尊さを逆説的に詠い上げているのである。

本稿の冒頭で言及した 2016 年の言語文化レトリック研究会でともにセッションした霜鳥（2017）は、21 世紀の現代社会においても Owen が戦争詩人の中でも最重要人物として存在し続けている状況をたどり、Owen の詩を読むという行為は、現代とは無関係の 100 年前の文学作品を鑑賞するという懐古的で趣味的な行為ではないと述べ、「Owen の詩的言語は、時代を越えて今の時代にも確実に生き続け、文学のみならず、文化・社会・政治・軍事といった様々な分野に多大な影響を及ぼし、現代人の戦争認識・表象と深く関わっている、きわめて強力な今日的アクチュアリティ

[12] このキリスト教的価値観は、『ヨハネの第一の手紙』1 章 5 節「神は光であり、神には闇が全くない」（"God is light, and in him is no darkness at all."）、『箴言』13 章 9 節「正しい者の光は輝き、悪しき者のともしびは消される」（"The light of the righteous rejoiceth: but the lamp of the wicked shall be put out."）にも表れている。

に満ちた言語なのだ。」（p. 7）と論じている。Owen の詩は、彼の生きた第一次世界大戦の世界を越え、100 年後の現代を生きる、戦時下の空気を吸ったこともなく、戦場に身を置く体験をしたこともない読者の胸にさえも強く迫る力をもつ。過酷な運命に甘んじる者たちへの慈愛、兵士として生きることの不条理に対する悲しみや怒りを表出した Owen の詩的言語の説得力は、普遍的な認知装置であるメタファーやオクシモロンといったレトリックの力に支えられている。

参考文献

Arthur, Max (2014) *The Faces of World War I: The Great War in Words and Pictures*. London: Octopus Publishing.

Berrey, Lester V. and Van den Bark, Melvin (1953) *The American Thesaurus of Slang (Second Edition).* New York: Thomas Y. Crowell Company.

Blunden, Edmund (1958) *War Poems 1914-1918*. London: Longman.

Freeman, Margaret H. (2000) “Poetry and the scope of metaphor: Toward a cognitive theory of literature,” in Barcelona, Antonio ed. *Metaphor and Metonymy at the Crossroads: A Cognitive Perspective*, 253-281. Berlin: Mouton de Gruyter.

Gavins, Joanna and Steen, Gerard. eds. (2003) *Cognitive Poetics in Practice*. London: Routledge.

岩田一男（1970）『英語・一日一言』東京：祥伝社。

亀井俊介・川本皓嗣編（1993）『アメリカ名詩選』東京：岩波書店。

Knowles, Owen, ed. (1999) *The Poems of Wilfred Owen.* Ware: Wordsworth Editions.

Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind.* Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Johnson, Mark (1980) *Metaphors We Live By*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lakoff, George and Turner, Mark (1989) *More than Cool Reason: A Field Guide to Poetic Metaphor*. Chicago: The University of Chicago Press.

Lewis, C. Day, ed. (1963) *The Collected Poems of Wilfred Owen: Edited with an Introduction and Notes by C. Day Lewis and with a Memoir by Edmund Blunden*. London: Chatto & Windus.

中元初美（2009）『ウィルフレッド・オウェン戦争詩集』東京：英宝社。

中元初美（2013）『現代英詩を読む―エリオット、オウェン、ラーキンの作品を中心に』広島：渓水社。

大森文子（1994）「オクシモロンについての一考察」『言語文化研究』第 20 号、65-85. 大阪大学言語文化部・言語文化研究科。

大森文子（2007）「メタファーのダイナミクスと視点：*Paradise Lost* の叙事詩的比喩をめぐって」『ことばと視点』5-19. 東京：英宝社。

大森文子（2011）「堕天使の変容と感情：*Paradise Lost* におけるメタファーの構造性をめぐって」『文化とレトリック認識（言語文化共同研究プロジェクト 2010）』21-34. 大阪大学大学院言語文化研究科。

大森文子（2017）「孤独と束縛：イメージスキーマで読み解く Owen の “S. I. W.”」『交差するレトリック：精神と身体、メタファーと認知（言語文化共同研究プロジェクト 2016）』19-28. 大阪大学大学院言語文化研究科。

大森文子（印刷中）「認知詩学」『認知言語学大事典』東京：朝倉書店。

Omori, Ayako (2015) *Metaphor of Emotions in English: With Special Reference to the Natural World and the Animal Kingdom as Their Source Domains*. 東京：ひつじ書房。

佐藤芳子（1993）『ウイルフレッド・オウエン研究第一巻：ウイルフレッド・オウエン戦争詩篇』東京：近代文藝社。

佐藤芳子（1993）『ウイルフレッド・オウエン第二巻：論文および関連文献訳』東京：近代文藝社。

瀬戸賢一（1997）『認識のレトリック』東京：海鳴社。

霜鳥慶邦（2017）「Wilfred Owen の詩的言語の今日的アクチュアリティをめぐって」『交差するレトリック：精神と身体、メタファーと認知（言語文化共同研究プロジェクト 2016）』3-8. 大阪大学大学院言語文化研究科。

Stockwell, Peter (2002) *Cognitive Poetics: An Introduction*. London: Routledge.

渡辺秀樹（2017）「Wilfred Owen の「笑い」の類語とメタファー　The Last Laugh は誰の笑いか」『交差するレトリック：精神と身体、メタファーと認知（言語文化共同研究プロジェクト 2016）』9-17. 大阪大学大学院言語文化研究科。

安田章一郎（1975）『ウィルフリッド・オウエン詩集』大阪：グローバル出版社。

〔電子資料〕

『ジーニアス英和大辞典』Konishi Tomoshichi, Minamide Kosei and Taishukan, 2001-2016.

『ランダムハウス英和大辞典』Shogakukan, 1973, 1994, and Random House, 1987.

Encyclopædia Britannica. Encyclopædia Britannica, Inc., 2019.　https://www.britannica.com

Oxford English Dictionary. Oxford University Press, 2019.　http://www.oed.com.remote.library.osaka-u.ac.jp